
イレギュラーを殲滅セヨ ～とある兵器オタクの奮闘記～

ATD-X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレギュラーを殲滅セヨ ～とある兵器オタクの奮闘記～

【Nコード】

N0685N

【作者名】

ATD-X

【あらすじ】

車に轢かれそうになった少女を助け、代わりに轢かれた兵器オタク。しかしその少女は神だった。重傷を負うも命に別状はなかった兵器オタク。しかしその神が恩返しに掛ける術を間違えて死の術を掛けられ死んでしまう。そして彼はリリカルなのはに似た平行世界に転生する事になるが、突如その世界に現れたイレギュラーと戦うはめになる。イレギュラーを殲滅セヨ ～とある兵器オタクの奮闘記～ 始まります。

プロローグ1（前書き）

初めての小説でおかしいところがあると思いますが、温かい目で見守って下さい。

プロローグ1

プロローグ1

やあ、こんにちは。俺の名前は ■■■だ。ってなんで名前が、言えないんだよ。おかしくないか？。しかもなんか身体が浮いてるし。まあいつか、とりあえず状況把握だ。下には俺が病院らしきところのベッドで寝ている。俺の考えでは多分下にあるのは俺の身体あれ？確か俺は一週間前に車に轢かれそうな子供をかばって重傷を負ったけど命に別状はないと医者も言っていたはず。なぜに幽体離脱をしている。まさかと思い横にある心電図を見る。

何故だ。

何故心電図が動いてない。しかもピーという音しか鳴ってない。

何故だ。

イッタイマゼランダー！！。

「その事について説明しよう。」 そんな言葉とともに周囲が光り真っ白な空間に移った。そしてまだ光つてるところがあったから、もしかしてこの光から女神やら死神やらが出てくると予想したが

いやあ驚いたなんせ出て来たのが

九十七式中戦車とT-34なんだから。判らない人は、自分で調べてくれ。作者は小説を書いたばかりなんだ。元々説明が下手な作者だ許してくれ。しかし、出て来たのが骸骨や少女や威厳のある人や光の玉なら分かる。なんで第二次世界大戦の日本軍とソ連軍の戦車なんだ！？。まあいいやとりあえず話し掛けるか。

主人公「あーその戦車2台、お前等何者だ」

T-34「俺達は神だ。」

九十七式「私はこの神の娘だ。」

主人公「ふーん、（死神じゃないのか。しかしなぜに九十七式中戦車とT-34？）で何か用。というか、その姿はなんだ。」

T-34「この姿は君が最後に考えたものが具現化した姿だ。」

九十七式「お前は一体最後に何を考えた？」

主人公「T-34と九十七式中戦車が戦ったときの損害比率について考えてた。」

T-34「……」

主人公「で何か用か？」

T-34「いや実は君が一週間前に助けた子供はな、俺の娘なんだ。」

主人公「え、これが？」

九十七式「ム、これ扱いとはひどいぞ。」

主人公「だって、戦車にこの子って言うのは何か違和感があるんだよなー。」

T-34「それでは元の姿になるのか？」

主人公「え、元に戻るの？。」

T-34「うむ、戻るぞ。」

T-34がそう言うのとまたもや目の前が光りさっきまで戦車があったところには、ガッチリとした体型の年齢30代前半ぐらいの戦士の格好をした男性と、やや短い剣を携帯した小学二年生のかわいい女の子がいた。

主人公「これなら話しやすいな。」

T-34「そうか。」

九十七式「これで私をこいつ扱いしないな。」

主人公「ああ、さっきは悪かった。」

ナデナデ

九十七式「な、何をする！」

驚いて警戒する九十七式。

主人公「あ、すまない。つい生前の癖で。」

九十七式「どんな癖だ（怒）」と言いながら剣を鞘から出そうとする九十七式

T - 34「よさないか、天花。」

とT - 34に止められる九十七式改め天花。

天花「しかし父上、私は勝手に頭を撫でられるのは苦手なのだ。たとえこの事を知らなくても、こいつの家族構成を見る限り、普通癖にはならないぞ。もしかペドか？」

主人公「違う！！」

T - 34「天花、こいつはただの子供好きだ。ペドでも変態でもない。この記録を見る。」

ピラ

天花「む、これじゃあ癖になるな。」

主人公「あのー、それは一体？というかあの女の子、天花って言うんだ。」

戦「そうだ。因みに俺の名前は戦だ。それと、その紙はお前のプロフィールみたいなものが書かれた物だ。」

主人公「ふーん。」

天花「仕方ない。今回は許そう。しかし次はないぞ。」

主人公「うん、ありがとう。【ニコッ】」

天花「わ、わかればいい／＼／＼／」

戦「（天花、こいつに惚れたか？）ゴホン、とりあえず話しがずれたが本題に入ろう。」

主人公「はい、確か天花ちゃんを助けたところまで話しましたよね。」

天花「天花で良い。」

主人公「分かった。」

戦「そうだ、それで助けたお礼に恩返しをしようと思ってな、何をしたら良いか迷ってな、助けられた天花に何をしたら良いか聞いてな。そしたら天花が、自分が身体強化の術を掛ける。と言ってな。」

主人公「そして、間違えて俺を殺したと。」

戦「うむ」天花の方を見るとすまなさそうにこちらを見てる。

天花「ごめんなさい。」

主人公「べつにいいよ。」

天花「え。」

主人公「失敗は誰にでもあるし、次こそは失敗ないようにちゃんと練習すれば良いし。」

天花「ありがとう。」

戦「こいつの場合は、猛練習だな。（笑）」

天花「な、父上！」

主人公「と言いますと？」

戦「だって、お前、術苦手じゃん。」

天花「う~~~~~」

主人公「頑張つてね、天花ちゃん。」

天花「なぜちゃん付けなのだ。」

主人公「だって明らかに年下だし、自分の力量が判らない未熟者だから。」

天花「~~~~~（怒）」

主人公「ハハ、可愛いな。」

天花「な、かわ!・・・」

主人公「おい、どうした？」

天花「なんでもない。／＼／＼／」

主人公「?、そうか。」

戦「で、話しは変わるがお前の処遇についてだが。」

主人公「俺の処遇は？」

戦「地獄行き。」

主人公「ふざけないでください。」

戦「すまんすまん、本当は転生だ。」

主人公「転生ですか。」

戦「ああ、ちなみに転生する世界はリリカルなのは平行世界だ。」

主人公「それはなぜですか。」

天花「お前はあの物語を見て何も思わないのか！！」

主人公「見るも何も俺は二次創作しか見てないぞ。」

天花「なら家に来い。今すぐに！早く！！休んでいるヒマはない！！！！」

主人公「は？ちよつ、待てよ。イテ！引きずるな、バカ！」

戦「ふう、やれやれ。なあ転移した方が良くないか？」

天花「じゃあ早く転移して。」

そしてこの空間から誰もいなくなった。

プロローグ1（後書き）

いかがだったでしょうか？ご意見ご感想お待ちしております。

プロローグ2

プロローグ2

何も変哲もなさそうな家の前が突如として光ったと思ったら、そこには一人の男性と一人の少年と一人の少女がいた。

Side主人公

突然目の前が光ったかと思ったら尻に衝撃が走った。

戦「よし、ついたぞ。ようこそ我が家へ。って大丈夫か？」

主人公「イツツ、なんとか。」

天花「お前は着地が下手だな。」

主人公「うるせえなー。」

戦「ハハハ、悪かった。オーイ！今帰って来たぞ！」

天花「ただいまー。」

戦さんと天花ちゃんがそう言つと

????「お帰りなさいー。」

と言う声と共に奥からなんかほんわかとしてそうな、女性が出て来た。

????「あら？この子は？」

戦「ああ、こいつはこの前天花を助けた子だ。天花が身体強化の術を掛けようとしたら間違えて、死の術を掛けてな。とりあえず、家に連れて来た。」

桜花「こんにちは。戦の妻の桜花です。」

主人公「俺は、……そういや生前の名前言えなかったな。」

天花「あ、そういえば。説明するの忘れてた。」

主人公「おい。」

戦「じゃあ名前を考えよう。」

Side主人公end

~~~~~一時間後~~~~~

レイ「じゃあ橘花レイで。」

桜花「よろしくね。レイ君。」

レイ「こちらこそよろしくお願いします。」

桜花「そんなに固くならなくてもいいわよ。」

レイ「は、はあ。」

天花「ところで、名前の由来は何だ？」

レイ「苗字は大日本帝国海軍初のジェット戦闘機、橘花<sup>きっか</sup>の読み方を《たちばな》に変えただけ。名前は同じく大日本帝国海軍の主力戦

闘機、零式艦上戦闘機れいしきかんじょうせんとうきの最初の漢字の読みから。」

天ノ桜ノ戦「……………」

レイ「どうした、なんか黙っているけど。」

天花「何でお前は最後に考えた事や名前の由来が軍隊の兵器に  
関係する事なんだ？」

レイ「それは俺が自他共に認める兵器オタクだからだ。」

天花「へ、へへ。」

桜花「と、ところでレイ君は何で家に来たのかな？」

レイ「あー、それは天花ちゃんにこれから転生する世界がアニメの  
世界の平行世界だから、そのアニメのDVDを見るために無理矢理。」

天花「だから、ちゃん付けで呼ぶな！」

桜花「天花」

突如、桜花が天花を呼んだ。そしてその場にいた。全員が桜花の方  
を向いた。そして、一言。

桜花「後で、お説教と術の特訓ね。」

天花「え。」

戦「お、桜花。ちょっと待て。」

桜花「はい？何か問題が？」

そう言うと、桜花の周りに得体の知れないオーラが出て来た。

戦「あ、あー、特訓の方は俺も手伝うぞ。」

桜花から出されたオーラにより、戦がやむなく桜花側に付いた。

天花「父上。レ、レイ。お前は私を裏切らないよな？」

レイ「天花。グッドラック！」

天花「にゃ~~~~~！！！」

桜花「レイ君。君は戦と一緒に転生の準備でもしておいて。その間に天花にきつちりとお灸をすえなきゃね。」

天花「あわわわわわわ。」

戦「じ、じゃあレイ君。転移するから、こっちに来てくれ。」

レイ「はい。」

天花「お、おい、リリカルなのはシリーズのDVDは見ないのか。そのために家n「見んのやめた。」た、頼む。私の延命措置と思つて「だが断る。」お、終わった。」

戦「レイ君。転移するぞ。」

天花「わ、私も一緒に。」

と、天花が言うとレイは振り返り、ニヤリと笑った。

レイ「ダメだ。君には、桜花さんにきつちりとOSIKARI、してもらわなきゃね。」

戦「それでは行くぞ。」

そして戦とレイは前回いたところに、転移した。

桜花「さあ、レイ君もああ言った事出しね。」

徐々に天花に近付く桜花。

天花「い、いやあああああああ！！」

S i d e レイ

レイは戦と共にプロローグ1で天花や戦と出会ったところにいた。

レイ「そういえば「作者が書き忘れてたが。」この空間って一体何なんだ？」

戦「この空間は本来死ぬべきはずじゃない魂が来る空間だ。転生もここでする。」

レイ「へー。でも関係ありませんけど、何でさっき天花ちゃんが桜花さんに怒られてたんだろう？」

戦「それは、また天花が勝手に桜花の部屋からDVDを取ったからじゃないか？」

レイ「またって、いつもやっているんですか？」

戦「いや、たまにやるだけだ。そんなことより転生後の設定を決める。」

レイ「もう決まってますよ。」

戦「い、いつの間に。」

レイ「戦さんの家に居たときに。」

戦「そうか。ではこの紙に書いてくれ。」

レイ「はい。……よし書けた。」

戦「どれどれ。……これはお前にしては以外だなだな。よし、じゃあ転生するぞ。」

と戦がレイを転生させようとした時。

ビー、ビー、ビー、ビー

レイ「何ですか？この警告音は。」

戦「まさか。ちょっと待ってくれ。……これは、マズイ。」

レイ「な、何がマズイんですか？」

戦「イレギュラーだ！」

レイ「イ、イレギュラー？」

戦「緊急封鎖！間に合え。」

キュイイイン。

戦「ふう、間に合った。しかしマズイな。」

レイ「何がマズイんですか。」

戦「ああ、お前を転生させようとした世界にイレギュラーが現れた。」

レイ「イレギュラーって何ですか。」

戦「それは「おい。いくさー」ん？おい、アレスト！」

アレスト「はあはあ、大変だ戦。」

戦「イレギュラーだろ。分かってる。」

レノア「だ、誰ですか／＼れだ、この人／＼こいつ」

戦「紹介しよう。アレスト、この子は天花が間違えて殺してしまった橘花レイだ。レイ君、この人は私の友人のアレストだ。」

レイ「よろしくお願いします。」

アレスト「こちらこそよろしく。」

アレスト「しかし災難だな、レイ。転生しようとしたら、新種のイ

レギュラーが出るなんて。」

戦「ちょっと待て、新種だと？」

アレスト「新種だが？まさかレイが転生する世界に。」

戦「そのまさかだ。」レイ「あー、イレギュラーって何ですか？」

戦「本来なら世界に存在しない物。その総称をイレギュラーと言う。」

アレスト「まあ判りやすく言うと、次元の狭間で生まれる生命体だ。自分達のテリトリーを拡大するために破壊活動をする。破壊された世界は奴等のテリトリーになる。」

レイ「なんとかならないんですか。」

アレスト「本来なら駆除用の兵器が有るんだが、今回は新種だからその兵器が聞かないんだ。」

レイ「じ、じゃあどうすれば？」

アレスト「イレギュラーの身体の部品を全て持ち帰り、解析すれば駆除出来る。」

レイ「……その仕事、俺がやっても良いですか？」

戦「な、何を言ってる。」

レイ「イレギュラーが現れた世界は、俺が転生する予定の世界。し

かも確定済み。だったらそれはもう俺の世界だ。自分の世界ぐらい自分達で守る。」

戦「しかし「良いんじゃないかい。」　ア、アレスト。」

アレスト「一応、今は一刻を争うんだ。今回のケースは対応が早ければ早い程早期解決に繋がる。」

戦「・・・・分かった。」

レイ「ありがとうございます。」

戦「ただしこちらからも能力を追加する。拒否権はない。」

レイ「分かりました。」

戦「よし、それじゃあ転生準備完了。行くぞ！」

レイ「はい！。橘花レイ、行きます！！」

そしてレイの周りが光りレイは転生した。

戦「頼むぞ、レイ君。」

アレスト「頑張れよ、この件はお前に繋がってるんだからな。」

レイの戦いが今、始まる！

## ブログ2（後書き）

次回の投稿は来週です。

## 主人公能力解説& a m p・プロフィール（前書き）

レイの能力を少し変えて見ました。第三話は現在執筆中です。

## 主人公能力解説& a m p・プロフィール

### 橘花レイ

性格は冷静で優しい（お人よし）。前世の出来事が原因で対人関係の構築が苦手になった。恋愛に疎く、興味の無いものにはとことん無関心。軍事（特に兵器）に詳しい。軍隊に若干影響を受けて規律正しい生活や鍛練を心掛けてる。「いつも心にユーモアを。」を心情にしている。容姿は黒髪黒眼で容姿ランクは上の下で、中性的な顔である。魔力ランクはこの物語開始時はBクラスである。

### 能力

#### 兵装召喚

デバイスに保存してあるデータを基に（デバイスについては後述記載。）いろんな兵器を召喚する。兵器を最大数100まで召喚出来る。ちなみに、艦載機やヘリを運用可能な艦には搭載機を最初から搭載してる。（艦に搭載されて召喚された艦載機やヘリは数に数えない。）普段は召喚しないが、特撮の兵器を出せる。使われてる技術が新しければ新しい程魔力を消費する。

## 超弩級大型ドック ミライ

建造能力や生産能力や大きさがとてつもないドック。形は巨大な球状で直径は十万Km。地球周辺の次元空間を周回してる。基地の生産能力は、大型の艦はだいたい3週間。中型の艦は2週間から1週間。小型の艦は1日で。戦闘機や戦車には数時間で出来る。小銃やロケットランチャーは物にもよるが数分から数十分掛かる。ちなみにSFや特撮系の兵器は一ヶ月から10ヶ月くらい掛かる。ただし生産するには、その兵器の設計図を入手しなければならぬ（CG合成でも可）。転移装置が内部にある。ドックの管理は容量が1000TBのコンピュータが行ってる。名前の由来はタイムスリップしたゆきなみ型護衛艦三番艦から。

## 訓練空間

ドック内にあるもので現実世界にとっての一分間が一日に感じる空間。特訓空間に転移して最初に着くのが湖の近くにある家である（ここをベースと呼ぶ）。ベースから様々な環境を再現した場所に行ける。）

## 艦魂感知

一部の人にあるレアスキル。平たく言うと、艦魂や飛魂を見る力。稀に幽霊も見える。

## 使い魔

## ギガマウス

12 doorと言うマニアックかつ、若干理不尽なゲームに登場する敵キャラ。能力は酸素を通していろんな材質の壁や床と融合出来る。それを利用して、いきなり壁に現れて対象を奇襲したり、諜報活動をしたり、裏工作をしたりする。原作ではしゃべらないが、この小説では能力に回復魔法や転移が追加された。人間化が可能で、しゃべれるようになってる。性別は女性である。外見はこの物語開始時で、なんかやんわりしている8歳の少女。性格はかわいい物や子供が好きで、「子供は撫でたり愛でるもの。」を心情にしている。下手に子供を傷つけよう物なら彼女から壮絶なお仕置きが待ってる。しかしそれ以外では、かなり良い性格をしてる。ちなみに人間と同じく成長する。

## デバイス

### フォース

ケータイ型のインテリジェントデバイス。ぶっちゃけケー。イ捜。官7のフォン。レイ。ーに似ている。性格は江戸っ子。能力は完璧なハッキングをしたり、自律行動が出来たり、兵装召喚が出来たり、ワープしたり出来る。じっとしてゐる事が嫌いによくゐるんな所に掛けるがレイが呼ぶとワープをして駆け付ける。活発に活動をするため、よくバッテリー切れになりかける。

レイの戦闘時には番号を入力して戦闘モードを切り替える。ついでにバリアジャケットもその都度変わる。戦闘モードは37種類有る。ちなみに彼が兵装召喚すると、彼が扱い安いように縮小される。銃火器以外は召喚出来ない。

## 第一話（前書き）

レイ「やっと第一話か。」

A T D - X「勉強で忙しくて投稿が出来なかった。」

レイ「まあ、がんばれ。」

A T D - X「主人公能力解説& a m p ;プロフィールの一部を解説しました。使い魔はそのままです。それでは第一話。どうぞ。」

## 第一話

S i d e レイ

こんにちは橘花レイです。ただいま絶賛落下中です。

レイ「戦ー！落ちるんなら先に言えよ。」

???<おい相棒。叫ぶ暇あったら変身しやがれ!。>

レイ「だ、誰だ!?!」

???<おいおい、ひでえな自分が設定したデバイスだろ、相棒。ポケットの中を見るよ。>

そう言われて、ポケットの中を見てみると。

レイ「これは。」

そこにはケータイ電話があった。

レイ「お前、フォースか?」

フォース<おう!、俺がフォースだ。よろしくな、相棒。>

レイ「ああ、よろしく。」

フォース<さて、とりあえず変身しろ。このままじゃ確実に死んじまう。>

レイ「なあ、フォース。何でセットアップじゃなくて変身って言うんだ?。」

フォース「くんなの簡単だ、変身の方が気合いが出るからさ。」

レイ「へえ。」

???「あの〜。」

レイとフォースが会話をしてると、声を掛けられた。

レイ「はい?。」

振り返ると天花と同じくらいの少女がいた。

???「あなたが橘花レイですか?。」

レイ「ああ、そうだが。君は?。」

レイがそう尋ねると笑顔になり。

ギガマウス「はじめまして〜。私、あなたの使い魔として戦様に創造された、ギガマウスです。よろしく願いします〜。」

とレイに自己紹介した。

レイ「俺は使い魔を頼んだ覚えはないぞ。色々と質問したいが、今はそんな状況じゃないな。」

ギガマウス「あゝ、そうでした。」

フォース<そうだ、忘れてた。>

レイ「お前ら、今の状況忘れんなよ。とりあえず今地上何メートルだ？」

フォース「1000メートルだ。」

ギガマウス「セットアップと言えば変身できます。」

レイ「よし、フォース、ブラックホークフォーム、セット<バーロ  
ー変身だ!。>・・・はあ。」

フォース<おい、どうした?、早く変身って言え。>

レイ「・・・フォース、変身!ブラックホークフォーム。」

フォース<Standby Lady, Black hawk fo  
rm. Setup.>

レイが緑色の光りに包まれて、光りの中からブラックホークを擬人化したようなバリアジャケットを着て、機関銃(M240)を持ったレイが現れた。

レイ「ギガマウス!、こっちに来い。」

ギガマウス「はい。」

ギガマウスがレイの手を掴んだのを確認した、レイは。

レイ「ビークルモード、作動。」

と眩き、またもや光りに包まれて光りの中から出て来たのは、UH-60シコルスキーブラックホーク輸送ヘリとなったレイが出て来た。

レイ「うお、危ね!。」

ギガマウス「マスター!、ちゃんと操縦して。」

しばらくすると、だんだんと安定して来た。

レイ「ふー安定した。フォース、着陸出来る所探してくれ。」

フォース「あいよ。」

レイ「さて、ギガマウス。ひとつ確認するが、お前俺の使い魔か？」

ギガマウス「はい。」

レイ「もしかして、戦が追加した設定か？」

戦「その通りだ。」

レイ「これは念話か。」

戦「そうだ、頭の中に直接語りかける感じで使った。」

レイ「こうか?。」

戦『そつだ。さてさっきの疑問だがまさにその通りだ。俺が勝手に追加してもらった。すまない。』

レイ『別にいいって。』

戦『他にも超弩級ドックミライと言う能力を追加させてもらった。』

レイ『超弩級ドックミライ?。』

戦『そつだ、超弩級ドックミライとは簡単に言つと小さな地球みたいな物だ。そこに行けるようにした』。

レイ『ありがとう。』

戦『それとも一つ、君に謝らなければならない事がある。』

レイ『何?』

戦『転送ミスで1998年5月のエチオピアに「タタタタタ、カン、カン、カン」遅かったか。』

ギガマウス『何、今の銃声は!?、当たったわよ!。』

レイ『1998年、5月頃、エチオピア……まさか。』

フォースく相棒。何か知ってるのか?。>

レイ『1998年5月頃にエチオピアはエリトリアと言う国から攻撃を受けてな、エリトリアの武装勢力が国境周辺にある都市、バド

メに侵入してバドメを占拠、バドメを巡る戦いが発生したんだ。今はその武装勢力がバドメに侵入してる所。この紛争の経緯を詳しく知りたい人はWikipediaを見てくれ。」

ギガマウス「マスター！、何でもいいから早く離脱して。」

レイ「分かってる。」

レイが機体を離脱させようとしてると。

「ズガアアアアアン」「タタタタ」「ドドドド」「ズドーン」

ギガマウス「な、何！？」

爆発音がした方向を見ると虫っぽい外見をした何かが6匹で暴れ回っていた。

レイ「あれは、何だ？。」

戦「あれがイレギュラーだ。」

ギガマウス「なんでこんなタイミングでイレギュラーが出るのよ」

（泣）」

フォース<おい、相棒>

レイ「フォース。セットアップだ！。ギガマウスは現地住人の避難を頼む。」

ギガマウス「え〜。」

レイ「後で何でも言う事聞くからさ。」

ギガマウス「本当に?」

レイ「本当だ。」

ギガマウス「了解。後で無しにするのはだめよ。」

レイ「分かった分かった。じゃあセットアップするか。」

フォースく相棒。セットアップじゃなくて変身だぜ。>

レイ「（無視）フォース、セットアくだ〜から〜、変身だっつてんだろ。!>あーもう。フォース、変身!アパッチフォーム!。ビークルモード作動。」

「ピカアアアア」

レイ「タリホー、エネミー6、これより攻撃を開始する。」

ブラックホークフォーム

速度が空中フォームの中で一番遅いが、汎用性と防御力が高い。モ

デルはU H - 6 0ブラックホーク輸送ヘリコプター。

アパッチフォーム

戦闘能力が高い。サンダーボルトフォームとは違い精密射撃が出来るブラックホークフォームよりも速度が速い。 モデルはA H - 6 4アパッチ戦闘ヘリコプター

タリホー

敵を見つけた時の合図。 元々は狩りの時に獲物を見つけた時の掛け声。

## 第一話（後書き）

レイ「おい、作者！。何で転生した所がエチオピア何だよ！？しかもなんか紛争の途中だしいきなり実戦かよ。マニアック過ぎだ。」

フォースくそうだぜ、作者。>

ATD-X「うお、いきなり出てくんな。」

ギガマウス「マスターの言う通りよ。」

レイ「おまえら、何で出て来たんだ？」

ATD-X「それは、本編に出て来たら、後書きに出すつもりだからさ。」

レイ「まあ、そんな事はどうでもいい。作者、ちゃんと反省してるか？」

ATD-X「自分で見てもマニアックだと思った。反省はしてるが、後悔はしていない！。」

レイ「・・・フォース、変身。アPATCHフォーム。おらあああああぁー！」

ATD-X「甘い！。カモン！ゲパルト。」

「キュラキュラキュラx5」 「ダダダダダダ」

レイ「何！」

ATDX「フハハハハ、近づけるものなら、近づいてみる。」

レイ「弾幕が激しい。！、そこだー！！」

「ガシューーン」「ズゴーン」

レイ「ちっ、外れた。」

ATDX「前回、やられたお返しだ！。全車両放てー！」

「ダダダダダダダ」

フォースく相棒そこだ！。>

レイ「ファイヤー！」

「ガシューーン」「ドガーン」

ATDX「ちっ、三番車がやられた。死角を無くせー！」

レイ「うっしゃあ、この調子でいくぞ。」

フォースくおう！>

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

ギガマウス「あそこで戦闘している作者とマスターは置いといて、

次回をお楽しみに！  
」

## 第二話 いきなり実戦（前書き）

ATD - X「やっと更新出来た。」

レイ「ATD - X。更新が遅かった理由は何だ。」

ATD - X「原因は二つ有る。

一つ目が新しいフォームがなかなか決まらなかった事。二つ目が祖母の家に帰省していた事だ。」

レイ「ふーん。ところで、いつ原作に突入するんだ?。」

ATD - X「一応4〜6話ぐらいの予定。」

レイ「出来るのか?。」

ATD - X「まあ、やれるだろ。それでは本編スタート。」

## 第二話 いきなり実戦

Side エリトリア武装組織所属兵

俺の名はアルカス、新米の兵士だ。俺は今、絶体絶命のピンチを迎えている。

バドメに侵入した俺達は、エチオピア兵を倒しながら、バドメを、占拠していった。

まあ、かなり民間人がいるから非武装の奴は、抵抗しない限り殺さない主義という甘い考えを持つ俺にとっては誤射に気をつけたり、途中で他の部隊が所属不明のへりを攻撃したと言う事があったが。

作戦に支障は無かった。

だが、突然デカイ虫みたいな奴が6匹現れて、暴れ回り俺達やエチオピア兵や民間人を攻撃してきやがった。

手持ちの武器で攻撃するが、ほとんど効いていない。重機関銃とRPG-7で一体破壊したが、弾薬が少なかったためにすぐに底をついた。

しかもそいつらどんどん小型の奴を増やしていやがる。

弾を撃ってくる奴や、突進してくる奴がどんどん増えてくる（こいつらには手持ちの武器は効くらしい）。そして俺達の部隊の前にデカイ奴が2匹、小型の奴をたくさん引き連れて来て、猛攻撃を仕掛けて来た。

仲間が次々と一方的に倒される。体を串刺しにされる奴。その身を裂かれて死んだ奴。弾を撃つ奴の攻撃を受けてぐちゃぐちゃになって死ぬ奴。大型の虫に踏み潰され、内臓が飛び出て死んだ奴。そし

て俺にもを虫が飛び掛かった時。そいつが突然破裂し体液がとびちった。

S i d e E N D

S i d e レイ

ビークルモードで、新たに現れた小型イレギュラー（弾を撃つ奴はシューター、突進してくる奴をガルスと呼称）を撃破しつつ、大型イレギュラー（ビッグと呼称）を探してたらビッグ2体が所属は解らないが、歩兵部隊を攻撃してた。

レイ「ヤバイ!。」

フォース<hellfire shoot>

「バシューーン」 「バシューーン」

「ドゴーン」 「ボゴーン」

ミサイル型の魔力弾が発射され見事に命中し、ビッグを一体破壊した。

レイ「よし。次!ロケット弾。」

フォース<hydra shoot>

「シュババババババ」

「ドガガガガーン」

今度はロケット弾型魔力弾が発射され周囲にいたシューターやガルスもろとも、ビッグを破壊した。

レイ「後は四体か。」フォース<相棒、5時の方向からシューターが多数接近。まずい、撃ってきやがった。>

「ピピピピピピ」

「ガス、ガン、ガン、ガン、ガン、ガス、ガン」

レイ「ぐっ！」

フォース<大丈夫か！？、相棒。>

レイ「ああ、大丈夫だ。今度はこっちの番だ！」

フォース<M203 Shoot>

「ダララララララ」

「ドカン」 「ドカン」 「ドカン」 「ドカン」

レイ「よし、後は。」

フォース<Human mode on>

レイはイレギュラーの群れを殲滅した後に、ビークルモードを解除して歩兵部隊に向かった。

Sideエリトリア兵

圧倒的だった。たった一機の戦闘ヘリが奴らの群れを全滅させた。そして

<Human mode on>

と言う声が聞こえ、そのヘリがいきなり光り出した。光りが収まると、そこにいたのは、ヘルメットを被り、所々に装甲やローターや

を身につけた少年だった。理解不能だ。そして、そいつはこっちに向かってきた。

アルカス「動くな！。貴様は何者だ！」

Side end

Sideレイ

生存者の傷を治そうとしたら、その中の一人が銃を構えて、殺気を出しながら俺のが何者なのかを聞いて来た。

レイ「名前を聞いたらそつちから言ってくるものだろ。」

アルカス「俺の名はアルカス・ステイングレイ。階級は二等兵だ。さあ、こつちは答えたぞ。今度はお前の番だ。」

レイ（名前は・・・そうだ、あれで行こう。）

アルカス「おい、答えろ！」 Side end

Sideアルカス

奴は何か考えるような仕草をした後にこう答えた。

レイ「ストーム0だ！。覚えて置け。」

アルカス「ストーム0？。」

レイ「そうだ。」

アルカス「ふざけるな、本名を言い！」

奴は俺の言葉を見殺した。そして腕に着けている機械をいじくった。

アルカス「おい、無視するな!。」

そう言っただ奴が近付こうとした時。

レイ「フォース、変身。ベイクホークフォーム!。」

いきなりそう叫び

< p a v e h a w k f o r m >

と言う声が聞こえ、奴の周りが光り出した。

アルカス「うお。なんだ!?。」

光りが収まると、そこにいたのは、最初の時とは少し違った姿になった、ストーム0だった。そして、腰に着けているポーチに手を入れて何かを探しはじめた。

ストーム0「えっと……。あつたあつた。」

ストーム0は腰に着けているポーチから包帯と消毒液とを出して、俺に渡してきた。

ストーム0「応急処置は出来るな?。」

アルカス「ああ、これでも歩兵だからな。」

ストーム0「そうか。じゃあここら辺にいる怪我人の応急処置を頼む。」

アルカス「貴様が何者が解らない以上、むやみに薬など受けとれん。」  
ストーム0「アルカス、ここで軽傷なのはお前を含めて、三人。内二人は気絶している。今すぐ動けるのは、お前だけだ。」

アルカス「（こいつの言うことにも一理あるか。）わかった。」

ストーム0「さーて、次に行くか。」

そう言つて、ストーム0は飛び去った。

S i d e e n d

レイはアパッチフォームに戻り、ビッグを探しつつ、ギガマウスと避難状況について、念話をしていた。

レイ『ギガマウス、今から送る座標に、逃げ遅れた人達がいる。回収してくれ。』

ギガマウス『わかったわ。』

レイ『後、マスターと呼ばなくていいから。』

ギガマウス『え、でも。』

レイ『ギガマウス、これは命令だ。』

ギガマウス『……わかったわよ。レイ。』

レイ『ありがとう。』

ギガマウス『じゃあ、切るわよ。』

レイ『ああ。』

フォース<相棒、ビッグをが三体出て来たぜ。>

レイ「よし、いくぞ。」

レイがビッグを攻撃しようとしたとき、隠れていたシューターがレイを攻撃した。

〔ピピピピピピピピピ〕

レイ「うわ！、多すぎだ！。」

あまりの攻撃の激しさにレイはいったん離脱した。

フォース<相棒、これじゃあアパッチフォームだときついぜ。>

レイ「ちつ、フォース、サンダーボルトフォームだ。」

フォース<おお、それならいけるぞ！>

レイ「よし。フォース、変身。サンダーボルトフォーム！」

フォース<Thunder bolt form>

レイ「ヒューマンモード、オン。さあいくぞ。」

レイは再度ビッグに突撃した。

「ピピピピピピピ」

シューターは突撃してきたレイを攻撃したが、

レイ「フハハハハ。ムダムダムダアア!!。」

レイのサンダーボルトフォームはかなりの防御力を誇る。モデルとなった実機は翼が折れても、二つあるエンジンが一つ壊れても、機体に三百もの破孔が有っても、飛べるという恐ろしく頑丈な航空機である。ちなみにレイが変身するフォームは全て実在の兵器をモデルにしている、一部を除いて本物より総合的に性能が上がってる。

レイ「消え失せるー!!。」

フォース<Avenger Shoot>

「ダラララララララ」 「ドガガガガン」

レイ「よし!。今だ。」

フォース<Maverick Shoot>

「ガシューーン」 「ガシューーン」

「ガシューーン」 「ガシューーン」

「ガシューーン」 「ガシューーン」

「ドカーーン」 「ドカーーン」 「ドカーーン」

「ドカーーン」 「ドカーーン」 「ドカーーン」

レイ「全弾命中」。

フォースく相棒、これでビッグは全滅だ。後はギガマウスに報告するだけだ。>

レイ「わかった。」

レイ「ギガマウス、聞こえるか？」

ギガマウス「聞こえるわよ。」

レイ「ビッグは全部倒したぞ。」

ギガマウス「ほんと？。よかった」。

レイ「そっちはどうだ？。」

ギガマウス「そうよ、大変なのよ！」

レイ「何が大変なんだ？。」

ギガマウス「今、街の方に戦車部隊が向かってるって。」

レイ「そうか。今どこにいる？。」

ギガマウス「わからない、街の中なのはわかるけど。」

レイ「よし、今から信号弾撃つ。そこに俺達がいる。」

ギガマウス『わかったわ。』

レイ「兵装召喚。」

レイは念話を切った後、兵装召喚を使い、信号弾を召喚して、使った。

「バヒューン・・・ピカアア」

レイ「ふう。」

レイは近くにあった、瓦礫の上に座った。

S i d e e n d

S i d e アルカス

俺は今、信号弾が上がった所に向かっている。

アルカス（あの信号弾、もしかしたら、ストーム0か？。）

そんな事を考えていたら、いつのまにか、信号弾が撃たれた所に着いた。

アルカス「こちら辺か。」

そして撃った奴を探したら、ストーム0が瓦礫の上に座っていた。

アルカス「あれは。」

だがそいつの後ろに弾を撃って来る虫みたいな奴がいてストーム0

を狙撃しようとしてた。

アルカス（ヤバい！。）

俺はとつさに銃の引き金を引いた。

S i d e e n d

S i d e レイ

瓦礫に座っていたら、突然近くで銃声が響いた。

レイ「なんだ！？。」

銃声のした方向を見ると、倒れたシューターとアルカスが立っていた。

アルカス「これで借りは返したぞ。」

レイ「悪いな。」

アルカス「気にするな。」

俺とアルカスが談笑していると、後ろから物音がした。アルノレイ「誰だ！？。」

二人が武器を向けた先にはギガマウスがいた。

ギガマウス「二人共、いきなり武器を向けないで！。」

レイ「スマン。」

アルカス「ゴメン。」

苦笑しながら謝るレイとアルカス。

ギガマウス「あら、そちらの人は?。」

レイ「ギガマウス、この人は俺の命の恩人のアルカス・ステイングレイだ。」

アルカス「初めまして、お嬢ちゃん。」

ギガマウス「レイの命の恩人でしたか」。初めまして、私レイの使い魔をやっています、ギガマウスです。よろしくお願いします。」

ギガマウスが自己紹介を終えた時、アルカスが何とも言えない表情になった。

レイ「?、どうした、アルカス。」

アルカス「・・・レイ。子供の君が、そんな趣向を持っているとは。」

レイ「・・・は?。」

アルカス「安心しろ。俺は人の趣向に口出しはしない。」

レイ「ちょっと待て、何を感じている!。」

ギガマウス「でも、ちょっと良いかも。」

レイ「ギガマウス！。そっちの道に目覚めてはいけない！！。」

自己紹介からだんだんと変な方向に話が向かってく三人。だが次の瞬間。

「チュイン、チュイン」

「ばっ」

突然攻撃されて、当たりを見回す三人。そこには、全方位に渡り、シューターがいた。アルカス「これは、ヤバいかもな。」

レイ「多分、信号弾を撃ったから集まって来たんだろうな。」

ギガマウス「ちょ、ちょっと！。どうすんの！？。」

アルカス「何か良い方法は。」

レイ「そうだ！。」

アルカス「どうした。何か良い案が出て来たか。」

レイ「ああ。」

そう言いながら、レイは、術式を展開する。

アルカス「な、何だ！？。」

レイを中心に魔法陣が展開する。

レイ「アルカス、こっちに来い。」

レイに言われて、恐る恐るレイに近づくアルカス。

レイ「転移!!。」

魔法陣が光った次の瞬間に彼らはミライに転移した。

超弩級ドック ミライーーーーー

誰もいない部屋で、突如光りが発生し、光りが収まると三人の人間がそこにいた。

アルカス「ここは、何処だ。」

レイ「アルカス。ここは超弩級ドック、ミライだ。」

アルカス「説明してくれ。」

レイ「アルカス。説明は後でいいか?。」

アルカス「なぜだ?。」

レイ「初陣だったから落ち着かないんだ。それに少しペースを上げすぎてな、魔法陣も展開して疲れた。」

アルカス「最後の方は気になるが、確かにそうだ。俺も初陣の後は落ち着かなかったな。」

レイ「悪いな。」

アルカス「気にするな。」

ギガマウス「外で話すより中で話した方が良いんじゃない。」

レイ「そうだな。アルカス、着いて来い」

そして三人は中に入った。

おまけ

ギガマウスの頼み

レイがアルカスを適当な部屋に案内したあと、レイとギガマウスは別の部屋にいた

ギガマウス「そういえば。」

レイ「ん。どうした。」

ギガマウス「レイ、約束覚えてる？」

レイ「約束？。」

ギガマウス「もう、戦闘の直前に言ってたじゃない。」

詳しくは第一話で

レイ「ああ、あれね。」

ギガマウス「今、使っていい？」

レイ「別にいいが、やることが限られるぞ。」

ギガマウス「大丈夫。簡単に出来るから。」

そう言いながら、不気味な笑みを浮かべてレイに近づくギガマウス。

レイ「ギガマウス、嫌な予感がするのは俺の気のせいかな？」

ギガマウス「気のせいよ。」

と言いながらどんどんレイに近づくギガマウス。そして。

ギガマウス「えいつ。」

ギガマウスがレイに抱き着いた。

レイ「うわぁ。何をするんだ。ギガマウス!？」

ギガマウス「何をするって、抱き着いてるだけよ。」

レイ「いや、そうじゃなくて。と、とにかく離れろ!。／／／／／」

ギガマウス「いゝやゝよ。」

レイがギガマウスの行動に苦慮し続けると。

アルカス「おーい休憩終わっ……てないようだな。ゆっくりしてくれ。」

レイ「おい、アルカス！。そんな事言っでないで助けてくれ。」  
「なんやかんやで時間をつぶした三人であった。」

フォース<.....俺すごい空気（泣）>

ベイプホークフォーム

武装は貧弱だが、応急処置や救助活動が得意。ブラックホークフォームと似てる。モデルはHH-60 ベイプホーク戦闘搜索救難ヘリコプター！。

## 第二話 いきなり実戦（後書き）

レイ「ATD-X。最後のあれは何だ！？。そしていきなり新キヤラ出すな！」

ATD-X「むしゃくしゃしてやった。後悔も反省もしていない。」

アルカス「いや、全然ダメじゃん。」

ATD-X「おお、アルカス。来たのか。」

アルカス「来たのかつて、お前が呼んだんだろ。」

レイ「なあ、ATD-X。アルカスって魔法は使えるのか。」

ATD-X「いや、全く使えないよ。」

アルカス「ちょっと待て。じゃあどうやって戦うんだよ。」

ATD-X「もちろん、銃火器で。」

レイ「それじゃ、魔導士戦じゃ戦いにくいぞ。」

ATD-X「そこらへんの対策はしっかり出来てるぞ。」

アルカス「そうか。」

ATD-X「それでは、またいつかお会いしましょう。」

アルノレイ「またいつかとはどう言っ事だ！。おい！。」

### 第三話 コソボ航空戦（前編）

あれからの経過を話そうと思う。

あれからアルカスにイレギュラーに関する説明をしたらかなり驚いていたが、すぐに自分の仲間をこちら側に引き込むと言った。そのあとはある計画を考えついた。計画の内容は

軍隊を作るというものだ。そうする事で、イレギュラーを効率的に倒す事が出来る。軍隊名はレインボースターズ。名前の由来は明るい感じが良いという事でこの名前になった。陸軍と空軍の装備は主に地球で使われている物が中心で、海軍は十九世紀末期～現在までに沈没した軍艦を調べ、そのうち修復が出来る艦を選び回収艦を派遣して回収。次元航行艦に改造する予定だ。次元航行艦に沈没艦を利用する理由は、まず一つ目に資源の入手ルートが確保されていないので、あまり資源を大量に使う艦の新造をあまりしたくないというもの。二つ目にミライの技術は沈没船を少ない資源で改造して最新鋭の戦闘艦にするのを簡単に出来る事。これが主な理由だ。

・・・・・・本音を言うと古い軍艦はかっこいいから戦っている姿を見たい、だな。

まず人員の確保だが、これが難しかった。まず大規模に集めると、管理局等の組織に目をつけられて、戦争や陰謀に巻き込まれたりする。かと言ってあまり小さくやると人員確保が遅くなりイレギュラーに対応しにくくなる。人員の確保に苦労していたがアルカスの同僚や話を聞いた上司やそいつらの知り合いやその知り合いの上司やらが、大半の装備ごとこちらに着いた（中には組織ごとこちらに着いたやつもいた）。おかげで一個師団と一個連隊規模の人員は確保出来た。

アルカス、お前ら何者だ？。

装備の内容は

戦闘機がMiG-19デヴィナッツアチ35機、MiG-21ド  
ヴァーッツアチ・アチーン20機。

輸送機がAn-2ククルーズニグ18機。

ヘリコプターがMi-4 30機、Mi-8ヴォースイエミ 26  
機、Mi-18ヴァスィムナッツアチ 20機、Mi-24ヴァ  
ーッツアチ・チトウイーリエ 16機。

戦車がT-34 50両、T-54 45両、T-55 44両、  
T-62 30両、T-64 28両、M4中戦車シャーマン45  
両。

装甲車がBTR-50 55両とBTR-60 40両とBRDM  
-1 30両とBRDM-2 15両。

対空車両がZSU-23-4シルカ 20両とV-75 10両。

ロケット砲が82mm BM-8 35両と132mm BM-1  
3（所謂カチューシャ） 30両とBM-14 14両とBM-2  
1グラート10両と63式107mmロケット砲40両。

自走砲が2S1クヴォーシカ 20両

上記に挙げた以外にも、野砲やら対空砲やらピックアップトラック  
等がある。

なお装備の愛称は原産国で使われるものを使っている。

とりあえず、集まった人員を陸軍、空軍に配備した。・・・当  
面の課題は三つ。一つ目は人員確保。特に海軍。少なくとも無人世  
界や観測世界を含む全ての世界に最低でも陸軍、海軍、空軍、合わ  
せて1000万人を駐留させなければならない。二つ目は兵器。今

挙げたほとんどの兵器が旧式で耐用年数が限界を超えるか超えかけているので新しく兵器を作らなければならない。三つ目は資源。これは三つの中でも一番重要である。理由は言わずもがな。以上の三つが今後の課題だ。

イレギュラーの活動だが、あのあといろんな世界。特に無人世界に多く現れた。戦力が少ないところから破壊しようとしたんだろうが、イレギュラーの出現をアレストや戦が教えてくれるので破壊された世界は今のところ無い。空を飛ぶ種類が出てきたりしてガルスやビツグやシューターに航空支援をしてかなりイラッとした。

さて、長い前置きはこれぐらいにして。今は1999年5月3日午前0時。俺はバルカン半島南部のコソボにイレギュラーが出る可能性があると言うアレストの知らせを受け、現在ミライで待機中である。

現在コソボはコソボ紛争と言う紛争が勃発している。（詳しくはWikiで）

本来なら現地で飛んで探したいところだが、むやみに飛ぶと、もなく戦闘機や対空ミサイルが飛んで来るため、やむなくレーダーでイレギュラーを搜索している。今回は仲間がいる。コールサインリユンクス1ことタカト・シマダとリユンクス2ことビル・グレイとリユンクス3ことケイシー・リデイスだ。

「いやあああああ！。ギャ。ドスー！ー！！」

レイ「うお。な、何だ。ギャ、ギャラ。ス？」

今悲鳴を上げたのがケイシー。

「フハハハハハ。我がリザー。ンに、勝てぬ者無し！」

今笑っているのがビルだ。

「・・・・・・・・（本を読んでる。）」

そのそばで本（表紙にクトゥルフ神話と書かれている）を読んでいるのがタカトだ。

ケイシー「くっ、こうなったら奥の手よ！」

タカト「（ピク）」

ビル「な、フ。ーザーなんていつの間に。」

タカト「（ピクピク）」

ケイシー「捕まえるの苦労したわ。」

タカト「（ピクピクピク）」

ビル「何！。リ。ードンが一撃で！？。」

タカト「（ブチッ）てめえら齒あ食いしばれえ！」

「ドゴッ」「バゴッ」

ケイノビル「痛い。ノゲファ。」

タカトは読書中に近くで騒がれるのが嫌いで、騒いだ場合は階級が上だろうが、他の隊に所属してようが、問答無用で殴られ説教を受ける。

タカト「がたがたと騒ぐな！」

レイ「タカト、落ち着け。お前等出撃前の緊張をほぐしたいのは分かるが、もっと静かにしろ。」

ビル「静か過ぎると逆に緊張感が増すんだが。」

ケイシー「そうよ。」

ちなみにゲームボーイは湾岸戦争では爆撃されたビルから発見され動いたと言う話がある（by Wiki）。この話を聞いた陸軍が戦場での兵士の娯楽として試験的に採用。兵士から絶賛され採用が決定。その後空軍や海軍が採用し、今やほとんどの陸、海、空全ての兵士や研究員、オペレーター等が持っている。人気のソフトはポ。モン、テト。ス、スー。ーマリオランドシリーズ等である。

困話休題

オペレーター「イレギュラーをレーダーで確認しました。」

雑談をしていたらオペレーターからの報告がありこの場にいた全員の目つきが変わった。

タカト「・・・・場所はどこだ?。」

オペレーター「プリシュティナより南西西40km、上空5000m。数は200」

プリシュティナを知らない人は地図帳を見なければ解る。

ビル「了解。」

ケイシー「結構多いわね。」

レイ「仕方ない、兵力差は圧倒的にこっちが少ないからな。フォー  
ス。変身、イーグルフォーム。ビークルモードオン。」

フォース<Standby,Lady.Eagleform,Se  
tup.Vehicle mode on.>

タカト「リUNKス1。発進準備完了。」

ビル「リUNKス2。発進準備完了。」

ケイシー「リUNKス3。発進準備完了。」

レイ「ストーム0より管制塔。発信準備完了。ストーム0より管制  
塔、リUNKス小隊とストーム0の離陸許可を求める。」

オペレーター《了解。ストーム0及びリUNKス小队離陸を許可します。》

レイ「よし。ストーム0。テイクオフ!。」

タカト「リUNKス1。テイクオフ!。」

ビル「リUNKス2。テイクオフ!。」

ケイシー「リUNKス3。テイクオフ!。」

そして、轟音と共に俺達は飛び去った。

ビル「おお。たくさんいるな。」

現場に着いてビルが最初に言葉を発した。

タカト「現場に現地の航空機がいなかったのは不幸中の幸いだな。各機。戦闘開始!。リUNKス1。エンゲージ!」

ビル「リUNKス2。エンゲージ!」

ケイシー「リュンクス3。エンゲージ！」

レイ「ストーム0。エンゲージ！」

さてここで今回出現したイレギュラーとビート隊の装備を説明しよう。

今回現れた種類は近接空戦種<sup>ドックファイター</sup>遠距離や中距離への攻撃は出来ないが、ドックファイトを得意とする。こいつの武器はエネルギー弾だけだが、その威力は高く3秒間の連射で戦車がスクラップになる。リュンクス小隊の装備は魔改造したMig-19。主な改良点は速度や上げたり、電子機器を最新型に変えたり、武装搭載量や航続距離を増やしたこと。この改造により第三代戦闘機と同等の強さを得た。ミサイルはAIM-9サイドワインダーとAIM-7スパローク爆裂型である。この爆裂型は敵機に着弾すると爆発し、周囲の敵もろとも撃破する。敵が密集している時に有効な物だ。平均で約20体の敵機を墜とせる。イレギュラーと空中海軍の圧倒的な勢力差をカバーするために生み出された兵器である。

タカト「Fox1！」

ケイシー「Fox1！」

ビル「Fox1！」

レイ「Fox1！。兵装召喚。零戦32型！」  
フォース<Sprrow shoot・Weapon summons・Shiden kai.>

各機が発射したミサイルが弧を描き、ドックファイターに殺到し、一気にドックファイターを撃墜した。さらにそこにレイが召喚した、50機の紫電改が後ろからやって来て、ドックファイターに殺到し、空中戦になった。

ビル「ビンゴ!。」

ケイシー「やった!。」

タカト「気を緩めるな。まだいるぞ」

タカトの言う通りまだ110体程のドックファイターがいる。

タカト「ストーム0。もつと召喚出来ないか。」

レイ「リUNKス1。これ以上は無理だ。」

タカト「そうか。」

タカトは残念そうに呟いた。

レイ「とりあえず俺は右翼のドックファイターを紫電改と一掃する。リUNKス小隊は、左翼を頼む。そっちには紫電改を15機やる。」

タカト「了解。リUNKス2、リUNKス3。いくぞ。」

ビル/ケイシー「了解。」

リUNKス小隊は紫電改とともに左翼の敵を攻撃した。

レイ「さて、こっちもやりますか。」

そして俺も紫電改と交戦しているドックファイターに突撃した。

Sideリユンクス小隊

ビル  
「Fox 2」

リュンクス小隊は現在左翼のドックファイターを撃ち落としている。

ビル「ビンゴ！。チャフ（呌）を出さないから墜とすのが楽だぜ！。  
YEHAAAAA！！」

ビルは、ミサイルを撃ちまくり、次々とドックファイターを。撃墜していた。

タカト「・・・・・・リンクス？。紫電改が爆発した時の破片で墜ちてる。注意して撃て。危ない。」

ただしさっきから紫電改ごと。

ケイシー「リユクス2。聞いてないわね……。」

そんなビルの様子に呆れながらもちやっかりドックファイターを撃墜しているケイシー。

タカト「・・・（プチッ）・・・チッ。後で、このバカに滑走路10 往復と伝えておけ！」

タカトがついにキレて感情を抑えながらも、強い口調でケイシーに言った。

ケイシー「り、了解。・・・！リユンクス2、後ろに敵が！」

ビル「げ！、やばい！」

ビルは後ろに敵がいるのに気づかなかった。そして気付いたときにはドックファイターが射撃していた。

ビル「ちくしょう！。振り切れねえ。」

急旋回や急降下で振り切ろうとするが、ドックファイターはしつこく追ってくる、が。

タカト「Fox2」

タカトの撃ったミサイルで九死に一生を得た。

ビル「サンキュー、タカト。助かったぜ。」

タカト「・・・任務中はコールサイン。」

ビル「ああ、ワリイ。」

その時、レイから通信が来た。

レイ《全機。イレギュラーはどのくらい残ってる。》

タカト「こっちは三体だ。」

レイ《そうか。こっちももうすぐ終わる。現地の軍がこっちに向かってくる。すぐに片付けろ。》

タカト「了解。」

レイ《じゃあ、がんばれ。》

そして、通信が切れた。

タカト「……………全機。聞いたか。すぐに片付けるぞ。」

ビル「マジか!。」

ケイシー「これでポケ○ンの続きが出来るわ。」

ビル「今度は負けないぜ。」

ケイシー「こっちだって。」

タカト「……………お前ら、まだ任務中。気を緩めるな。」

ビル「分かっている。タカト。」

タカト「……………任務中はコールサイン。二度目だから、滑走路を10往復を時速10kmダッシュ、蛇行で20往復に増やす。」

ちなみに滑走路は1kmぐらい。幅30mである。

ビル「ヴェー!?!。聞いてねえぞ!。」

ケイシー「自業自得よ、リUNKス2。」

ビル「そんな。・・・・・・コノウラミハラサデオクベキカ。」

ビルは近くに残っていたドックファイターに八つ当たりするような感じで攻撃して、またたくまに全機撃墜した。

ケイシー「す、すごい。」

タカト「・・・・・・いつもこれぐらいやってくれればいいのに。」

そして三者三様（二者二様?）の反応を示す。その時ミライから通信が着た。

オペレーター「《新たなイレギュラー反応を確認!。現在場所を捜索中。》」

## イーグルフォーム

近く中距離での空中戦が得意。運動性能と加速性能に優れている。モデルとなった兵器はF-15イーグル。

## エンゲージ

敵と戦闘するときに使う言葉。

## FOX 1

セミアクティブレーダーホーミングミサイル（中々長距離ミサイルの誘導方式の一種で、機首から発信されるレーダー波の反射波を探知しそれを基に目標に向かう。欠点は常に機首を敵機に向けなければ命中しない事。）発車時に友軍に注意を促す時の符丁。

## FOX 2

赤外線誘導ミサイル（短距離ミサイルの誘導方式の一種で、目標のエンジンが発する熱を感知して目標に向かう。昔は味方の発射したミサイルの熱を感知してそれに向かったり、太陽の方向に向かったが今は改善されている。）発車時に友軍に注意を促す時の符丁。

## 第三世代戦闘機

ミサイルを本格的に搭載するようになった戦闘機。一部は機関砲を搭載せずミサイルだけを搭載し、運動性能が劣悪な戦闘機になった（所謂ミサイル万能論）。当時はミサイルの精度が悪く誤射がたくさんあり、目視で確認してから撃てと言われ、ベトナム戦争の際には米空軍は北ベトナムの旧式機に接近戦を挑まれかなりの被害をだした。

代表的なのは

F-4 F-5 F-111 Mig-23 Mig-25等

### 第三話 コソボ航空戦（前編）（後書き）

現在テスト期間中なので次回の更新は14日以降となります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0685n/>

---

イレギュラーを殲滅セヨ ~とある兵器オタクの奮闘記~

2011年10月7日17時47分発行